



里の自然をまもり、川の楽しさ・親しさを伝える

上桂川を守る会

上桂川（かみかつらがわ）について

上桂川は、京都市の北西部の京北地域に位置し、淀川水系桂川の上流域の呼び名であり、建設された日吉ダムより上流を指す。

上桂川が流れる京北地域は、自然豊かで、古来より良質な木材の生産地として知られる。また、活動組織の拠点の一つである広河原地区周辺は、かつて炭焼きが盛んで、「鞍馬炭」の産地として有名であった。



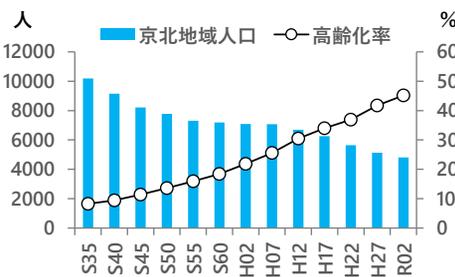
上桂川の現状

自然豊かで林業が盛んな地域を流れる上桂川には、遊漁として人気のあるアユやアマゴの他、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオが生息している。

しかし、昭和年代のダム建設による影響で、淀川から遡上してくる天然アユの姿は認められず、漁協の放流事業に資源が依存している。

また、近年の河道掘削や築堤、護岸工等の河川改修によって、アマゴやアブラハヤなどの在来魚の生息環境が悪化している。

加えて、現在、上桂川流域の京北地域では少子・高齢化が進行し、河川環境だけでなく、山林の荒廃など流域環境の悪化も懸念され、地域および都市住民のこれら保全への興味喚起と地域活性化が大きな課題となっている。



組織の設立と活動の目的・方針

上記課題の中、漁業者や市民団体、地域住民が主体となり、平成 29 年度に「上桂川を守る会」を設立した。なお、組織体制における市民団体は、釣り人やそれに係る職人、ミュージシャン等で構成された”Woodstick”。地域住民は、啓発活動を行う地区の自治会メンバーである。

活動目的は、①河川環境や生態系の保全、②子どもたちの自然環境やその保全への興味喚起。また、①と②の活動を通じた地域活性化である。



○ 上桂川 の環境や生物の保全

- ダム湖を通じて再生産する陸封アユが、最近散見される。その実態と新たな資源としての可能性を検討する。
- 魚の移動を可能にする簡易魚道の設置や、産卵床・育成床を造成し、アユや在来魚の保全に努める。

○ 子ども の自然環境やその保全への興味喚起

上桂川流域や都市部の子どもや保護者を対象に、自然啓発イベントを開催し、山や川の環境、またその保全への興味喚起や理解増進を図る。また、当取組と上記の保全活動を通じて地域の活性化を図る。

川の環境や生き物を保全し、里の魅力を伝える

(1) 陸封アユの調査

上桂川は、世木ダムの建設・その後の日吉ダムの完成により、淀川からの天然アユの遡上は認められない。しかし、最近、日吉ダム湖内で再生産した陸封アユが、世木ダムサイトで確認されるようになった。そこで、本種が確認できるダムサイトで望遠カメラや水中ドローンを用いて、その実態を調査し、新たな資源としての可能性について検討している。



(2) 在来魚等の保全

活動区域には、数多くの堰堤が設置されており、これらが在来魚の移動を阻害する。そこで、石積み式や竹製堰上げ式の魚道づくりを試行している。また、アユ産卵場における河床耕うんや、在来のアマゴやハヤ類などの稚魚の餌場・隠れ場となる育成床の設置などを実施している。



(3) 「川辺の子供教室」の開催

上桂川流域や都市部の子どもや保護者を対象に、「川辺の子供教室」を開催している。当会の構成員である”Woodstick”が所有する手づくりの体験型多目的施設「広河原トラウトタウン」を拠点に、①川遊びガサガサ体験、②釣り体験、③アマゴ発眼卵放流などを行っている。



活動の効果と今後の方針

陸封アユ調査では、ダムサイトにアユが毎年集群していることが判明した。また、その数は、最も多い日で約 10 万尾と推定された。これらアユは、上桂川に遡上することができず、時間の経過とともに数を減らし、9 月には全くいなくなる。今後、これら陸封アユを有効利用するための方策を検討する必要がある。

川辺の子供教室は好評で、参加する子ども会員数も年々増加している。また、こうした取組が釣具・アウトドアウェアのメーカーから評価され、協働で活動を行いたいなど声が聞こえるようになった。今後も、広く一般に自然環境の魅力や楽しさ、大切さを知ってもらう活動を継続し、これら取組を通じて地域の活性化を図っていきたい。

